

## 論文要旨

＜目的＞1歳6か月健診において、精神発達が気になる日本に暮らす外国人の子どもやその家族に対し、保健師がどのように子どもの発達を捉え、判断し、実際に働きかけているのか、また、その行動の背景にある保健師の意識など支援の特徴を探究する。

＜方法＞研究デザインはインタビューによる質的記述的研究である。研究協力者は、行政機関に3年以上所属する保健師であり、母子保健・外国人の子どもへの支援を行ったことのある6名であった。データ収集は2017年10月から11月にかけて行い、半構造的インタビューにてそのデータを収集し、質的記述的にその内容を分析した。

＜結果＞保健師は、1歳6か月健康診査における日本に暮らす外国人への支援として、まず【外国人ということをひとつの個性として捉え、個別性を大切に関わる】ことを基盤とし、意識しながら実践を進めていた。その上で、【子どもの発達を言語発達のみならず、あらゆる方向から把握し、判断する】、【発達の捉え辛さなども加味しつつも伝えるべきことは伝え、保護者が子どもの発達の課題を理解できるよう気づきを促す】、【文化や価値観に寄り添いつつも今後の生活の意向を踏まえ、「日本で生活していく」ということを共に考え支える】、【健診というチャンスを逃さず、何らかの形で継続的につながることができるよう道筋を作る】の4つの関わりを、外国人の子どもとその家族の状況に応じて随時行っていた。また、外国人が対象の場合、言語の違いによる支援の困難さがあるため、支援する際に用いる手段として、適宜【意思疎通を円滑に行うため、必要に応じて言語面を補足する】ことを行っていた。

＜結論＞保健師は、外国人の支援において、日本人と同様に個別性を尊重し、ひとりの子どもとして捉え、先入観を持たずに発達を判断し関わる一方、外国人の特徴を把握し、文化や価値観の違いに寄り添うことを意識して支援していた。そして、1歳6か月という早い時期から将来を見据え、健診という機会を逃さず、外国人と何らかの形で関係性を築いていた。このことは、1歳6か月健診において気になる外国人の子どもやその家族への支援の特徴であり、その重要性が示唆された。今後は、本研究の結果を活かし、精神発達が気になる外国人の子どもや家族を早期に発見し、家族と協働しながら支援していくために、外国人の発達支援に関する保健師の意識の変革や能力の向上を行う必要がある。